

氏名	Saiki Fernando Cardoso
ヨミガナ	サイキ フェルナンド カルドゾ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第634号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 「Incorpossível」 「身体内在可能性」 版画による身体の変貌 〈作品〉 「Incorpossível」 「身体内在可能性」 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎
（論文第1副査）	立教大学	名誉教授	（ ）	宇野 邦一
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ミヒャエル・シュナイダー
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	保科 豊巳
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	

（論文内容の要旨）

「Incorpossível-身体内在可能性：版画による身体の変貌」は、身体を版画の持つ“増殖”の可能性を自由に実験できる領域と捉え、美術的視点から考察した学術研究である。

本研究では、身体を時計の機構（身体-機械）と同じように、多関節で機能的な生体であると理解し、亀裂や隙間の探求によって、身体の非組織的な内部にまで立ち入ることに焦点をあて、新たな意味や異なる構成を生み出すことを可能とするべく、その構造を解体する。

そのために、版画、より具体的には、水性木版画を研究手段として採用する。本研究における身体の解体で中心的な役割を果たすのは、一つの媒体に記されている情報をもう一つの媒体に転写することを可能とするマトリックス（版）である。

本研究及び本論文は、制作過程に重点を置き、結果の考察と材料との関係に深く関連する芸術的実践を実験的に行う。本研究での、版画制作は、単なる作品の制作ではなく、むしろ制作過程における学習と考察が重要であり、芸術的思考を育むための過程としても重要であるといえる。

本論文は、まず研究開始以前の背景を紹介する。次に、ドローイング、彫り、プリントという三つの段階から、本研究における版画の実践を述べる。その目的は、研究にわたって受けた芸術的な影響（ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ、ラース・フォン・トリアー、ハンス・ベルメール、ハンス・ブレダー）、哲学的な影響（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、ジョルジュ・バタイユ）、そして文学的な影響（聖書、聖テレサ、ホメロス、オウィディウス、アントナン・アルトー）を紹介することにある。それにあたって、版画、身体、及び制作過程で結果に影響があった選択について考察している。

次に、“Incorpossível”という中心的概念のもとで、四つの版画のシリーズ、一つの芸術的行動、一つのインスタレーションという研究の結果を詳細に論じる。具体的には、“Aparições”（「あらわれる幻影」）、“Quimera I”（「キメラⅠ」）、“Quimera II”（「キメラⅡ」）、“Jigsaw Puzzle”（「ジグソーパズル」）という版画のシリーズ、衣服を身につけるという芸術的行動である“O Rei Nu”（「裸の王様」）、マトリックスを利用しているインスタレーションの“1+1→n-1-1”である。

最後に、新しい存在の在り方を探求するために、本研究では芸術的実践を通して、差異を認めない固定観念に支配されたものとしての身体を解体してみた。同様に、それらの画像の間に差異を生み出すために、実験的な実践を通して印刷の秘める可能性を拡大する方法を探求した。

（論文審査結果の要旨）

芸術によって創出される人間身体の図像には長い歴史があり、造形芸術は身体イメージ・表象を決定するのに、少なからず大きな役割を果たしてきたと言える。サイキ氏は、この論文と版画制作を通じて、特に男性・女性の身体像を、版画によって操作し、解体し、再結合しながら、とりわけ性的身体をめぐり通念を問い、いわば異なる身体、異質の性と生を追求しようとした。この論文は、身体論であり、同時に版画論でもある。性的身体を理念的に考察することと並行して、版画の制作過程そのものに、この考察を浸透させた。版（マトリクス）を掘り、インクをのせ、紙に転写するプロセス自体が、もうひとつの身体追求として実験され、それが論文において反省的に分析されている。

「亀裂や隙間の探求によって、身体の非組織的な内部にまで立ち入る」（論文要旨）と表現されたように、性的身体（そして性差）を解体しつつ、あくまでも流動的にとらえようとする傾向は、人文諸科学でもさかんに検討されてきた。サイキ氏は、とりわけドゥルーズとガタリの著作に現われた「器官なき身体」の概念に触発されながら、器官や機能の表象から離れて、より微細な流動体として身体を構想し、変幻自在なカメラとしての身体像を、男女の身体マトリクスのヴァリエーションとして展開している。そこには現代の諸芸術、映画のみならず、神話やキリスト教芸術からの引用もあって、追求の展望を広げている。論者の見識の豊かさが伺えるが、芸術学的には、もう少し的を絞った集中的考察があるとよいと思った。

版画の「制作過程」そのものの考察においては、版の素材を「掘る」という行為そのものを「地中の身体」の探求としてとらえ、版とインクと紙の出会いのプロセスさえも、やはり「非組織的な内部」として考察することによって、技法の問題を異なる身体探求として繊細に考察している。この点は特に評価に値すると思う。論文としては、このような〈方法論的考察〉をめぐって、古今の版画家たちが何を考えてきたかについて比較的な考察があるとよいと思った。

全体として、現代の哲学・芸術における性的身体のような追求を視野に入れながら、版画制作を通じて独自に問いを立てて、この追求を通じて版画の「身体」をも本格的に問題化するというもくろみは明確で、論文も説得的に構成されていると感じた。

（作品審査結果の要旨）

フェルナンド・サイキは、日本の木版の伝統の中でジェンダーアイデンティティとリプロダクション（複製・生殖）の表現を見つけるために研究を始めた。彼は伝統的な工芸と美学の領域で研究を始めたが、早期に制限が強すぎることを証明しました。彼の最後の作品からは、彼が恩地孝四郎、棟方志功、磯見 輝夫、三井田盛一郎などのアーティストの作品に基づいた現代日本の木版の開発の過程が見て取れます。

それらは全て、版画のプロセスの中で版をフリーマトリクスとして扱うアプローチか、またはプロセス自体をメインとして扱うアプローチのどちらとしても、版木を刷って絵を得るという版画の従来の制限を超えた視覚言語を形成することに成功しています。これは与えられたイメージを複製する単なる手段としての印刷行為とは対照的な創造的な行為です。

創造的なプロセスにこの重点を置いたことで、フェルナンド・サイキは版を、自由な変化と再結合に使用できる特定の視覚コードを保持する素材として扱うことができました。特に、水性木版独特のこの側面を、

ジェンダーアイデンティティ、知覚、再現のトピックと組み合わせ、彼は概念的なフレームに沿ったプロセスを使用することができました。彼は男性と女性を表す2つの等身大の人物の版から始め、変化する組み合わせで、絶えず変化する手順で材料を変化させる際に、それらを刷る際の無数のバリエーションを作成することを達成しました。

断片的なイメージの明確な視覚的表現をスタート地点に、変化していくそのバリエーションを経て、前に版木に彫られたイメージが更にぼやけたイメージとなり生成されました。版木は刷りを重ね、イメージが引き剥がされるに連れて暗くなり、この再結合されたマトリックス（版）は自由に結合されたDNAコードのような機能を持ち始めます。そしてコード化された身体は、版と紙を通して解きほぐされ、結び付けられました。彼はこれを版画の刷りにおける水分量の調節の応用を用い、絵画的なアプローチで視覚化し、このイメージの液化という行為はジェンダーアイデンティティの流動性と、物理的および社会的にカテゴライズされる性別の存在を理解するための非バイナリセットの考えと呼応します。刷り終わると版にあった水分は蒸発し、イメージは固定された形のままになりますが、私たちの物理的存在（身体）の大部分を構成する水は一定の流れを続けます。

博物館の壁のコーナーを跨いだ多数の版画のインスタレーションは、イメージが重なり合って境界を失い、目が感覚をさまようことを可能にし、見えるすべてのイメージを潜在的な画像と1つのマトリックスに由来する存在の1つの体験に再帰できるということを示しました。

このように、彼の作品は版画の刷りと複製・増殖のプロセスを超越し、それ自体が創造的な行為としてのインスタレーションとその記録となりました。

（総合審査結果の要旨）

FENANDO CARDOSO SAIKI はブラジル、サンパウロで彫刻を専攻し、その後日本の浮世絵木版画に興味を持ち来日し、木版画を中心に研究を進めた。本提出論文及び作品の「INCORPOSSIVEL 身体内在可能 版画による身体の変貌」、「INCORPOSSIVE」は、木版画を起点とした制作とこれを裏付ける論考、殊にドゥルーズ・ガタリ、ジョルジュ・バタイユを参照し、思考及び制作プロセスを相互に関係させ作り上げたものである。

作品は木版画の形式を採用しながらいくつかの階層で制作、思考されたといつて良い。一つには中心的技法である墨単色で構想された木版画である。これに手漉き和紙の使用と版形式上の複数性多数性という機能が加わる。フェルナンドは版木のことをマトリックス（matrix）と表現している。これは東欧の版画作家たちがよく使う表現であるが、日本では古い印刷所において母型と呼ばれたものと語義を同じくする。つまり母なるものが分身としてのイメージを複製、印刷していくのである。これを1つの主題として女性身体をおよそ等身大で版刻することから始められ、次に男性像が作られる。人間が生殖するための2つの性は、自身の宗教的背景であるカトリック、キリスト教におけるアダムとイヴとして想定されていく。そしてモデルとなるのは自身とその妻であり、参照されるエロティシズムを表すイメージが綿密に接続され、これを想起させる画像がインターネット上で徹底的に検索される。ここで男女それぞれの忘我の表情に至るまでが丁寧にデザインされ作画に引用された。こうして版の制作が完了する。

続くプロセスの印刷においては、思考の核にドゥルーズ・ガタリがアントナン・アルトーの器官なき身体から創造した概念が援用されることになった。器官なき身体という概念は定義し難いものであるが、彼はこれをある可変性として捉え「INCORPOSSIVEL 身体内在可能」という身体の可能性ではなく、可能身体というニュアンスのイメージを構想する。これを実現する技法が墨単色の木版画と様々な手漉和紙の組み合わせによるおびただしい数の印刷のバリエーションである。バリエーションは、版同士のモンタージュ的な組み合わせ、彫られた版の深度を摺り具によってコントロールすること、墨の濃さ、水分量をコントロールすることで作られている。これにより、版の潜在性と身体内在可能性が開かれイメージ化されたのである。

以上をもって、審査グループはこれを評価し博士号適当と認めた。